

3) 新しい園芸植物の開発・普及・展示に関する調査研究

徳原 憲¹・端山 武¹・稲田幸太¹・具志堅江梨子¹
比嘉和美¹・具志堅雪美¹・佐藤裕之¹

キーワード：遺伝資源 花卉 育種 産業振興 ラン

1. はじめに

沖縄県では温暖な気候をいかした熱帯性作物の生産や、熱帯花卉類を用いた観光施設運営を行う事で本土と差別化を図っている。しかし、沖縄県環境に適する品目は限られており、その拡充が期待されている。

また、沖縄県の在来植物の中には、現在、花卉園芸植物として広く利用されている品目と同じ分類群に属する種も自生している。これらの多くは未利用遺伝資源であり、育種等での利用が期待できる。

本研究では地域産業振興および沖縄県在来植物の価値創出を目的として、遺伝資源収集、育種、種苗増殖、作型開発、教育普及、展示利用等を行うものである。

2. リュウキュウベンケイ

リュウキュウベンケイ (*Kalanchoe spathulata* DC.) は沖縄県に自生するカラコエ属の植物である。本属は花卉園芸植物として重要な分類群であり、いくつかの原種が交配育種により園芸化されてきた。しかし、本種は観賞価値が高いにもかかわらず、育種素材として使われてこなかった。本種は既存の品種にない長い茎を有する事から、切花用品種の育種素材として有用であると考えられた。

千葉大学と共同で本種の育種に取り組んだ結果、沖縄の環境に適する切花用品種を開発するに至った。これらは「ちゅらら」シリーズと名づけられ、令和6年3月までに10品種を品種登録、4品種を品種登録出願した。

「ちゅらら」シリーズは新規花卉品目として産業振興への貢献が期待された。平成27年度より沖縄県農林水産部や県内出荷団体等と共同で栽培技術体系の構築を行い、平成28年度には収穫物を県外出荷するに至った。その後、出荷物に輸送痛み（花首の曲がり、花の押しつぶれ、花スレ）が課題となり、輸送方法の見直しを図るとともに、輸送性の高い品種の開発を行った。その結果、輸送痛みの軽減と市場取引価格の向上が認められた。これらを地元農家等

にて生産・出荷し、収穫物の一部は海洋博公園で展示をすることで産業振興につなげている。

令和5年度は、依然として残る輸送性の課題を解決すべく育種を継続するとともに、優良個体の品種登録申請を行った。

令和元年11月28日に出願受理された3品種（ちゅららライト、ちゅららマゼンタ、ちゅららパール）について、令和5年6月8日付けで品種登録に至った。本品種は花茎が固い特徴を有し、輸送中の茎曲がりについて一定の改善が確認されていることから、地元で継続的に営利生産がおこなわれている（写真-1）。しかし、弁質がやや薄く、花卉数が比較的少ないことから、花スレや押しつぶれに十分対応できてこなかった。そこで、これらの課題に対応した4品種をさらに選抜し、「ちゅららシュガー」、「ちゅららピンク」、「ちゅららコーラル」、「ちゅららレッド」と名付け品種登録申請を行った。その結果、令和6年2月21日付で出願が受理され、普及に向け苗の増殖を行っている（写真-2）。



写真-1 本部町における「ちゅららライト」、「ちゅららマゼンタ」、「ちゅららパール」生産の様子

¹植物研究室



写真-2 品種登録申請を行った4品種
 ‘ちゅららシュガー’、‘ちゅららピーチ’、‘ちゅらら
 コーラル’、‘ちゅららレッド’

3. その他の園芸植物

ダイサギソウ (*Habenaria dentata* (Sw.) Schltr.) は、日本では千葉県以南に分布しているラン科植物で、環境省レッドリスト、沖縄県レッドリスト共に絶滅危惧種 1B に選定されている。花序を含めた茎の長さは 30-60cm に達し、2cm 程度の純白の花を多数咲かせる。観賞価値の高さと長い茎を有することから、切り花としての利用が期待されるが、収穫後の花持ちが悪い、弁質が薄い等の課題がある。この点を解決するため、近縁属の遺伝資源を用い交配育種を試みた。令和 5 年度に開花した雑種は先述の課題を十分に解決するに至らなかったものの、花の大きさが 4-6cm に増大し、観賞価値の向上が確認された(写真-3, 4)。今後は本雑種を育種親として利用し、実用的な品種の開発を目指す。



写真-3 新たに作出されたダイサギソウとその近縁種との属間交配種

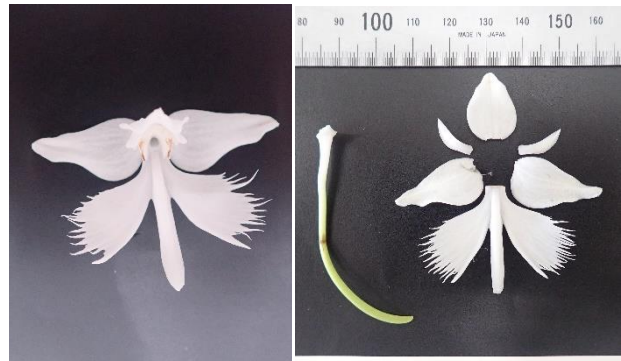


写真-4 新規作出された交配種の花(左)とそれを分解したもの(右)

4. 外部評価委員会コメント

ちゅららシリーズの輸送上の問題点を解決するための育種が継続的に行われ、新たな成果が得られつつある点は評価する、さらなる新規性を持った品種開発も考慮する必要がある。ダイサギソウと近縁種の属間雑種作出は今後の新たな切り花用作物としての利用が期待される成果であり、効率的なクローン増殖と栽培技術の確立が望まれる。また *Habenaria* 属には花色や花型の異なる種がかなり存在するので、これを契機に育種の幅を拡大してもよいのではないかと。(三位顧問：千葉大学名誉教授)

新たな品種開発は時間と労力を必要とする大変な仕事。課題を整理しながら着実に一歩ずつ前進されている。その他の園芸植物遺伝資源を利用した新規花卉品目の開発にも期待したい。(上田顧問：ぎふワールド・ローズガーデン理事)